

京都文化カプロジェクト実行委員会理事会（第4回）

主な御意見

- ・コンセプトメッセージの「創造する」という言葉には様々な意味が込められている。人文社会系の学術は過去を振り返る学問で、自然科学系の学術は未来をつくる学問で、それらをつなぐのがアート。アートというタイムマシーンに乗って京都の長い歴史を旅することができる。理由は、京都の生活文化の中からのメッセージである思想や考え、アートが息づいているからである。

来年度の美術工芸はただ作るだけではなく、使う立場に立って、生活文化の中に生かしていただき、盛り上げていただきたい。

京都人は自然という過去からの遺産を日々使っており、それが京都の伝統的なものを支えている。そこに、日本国内や世界から様々なものが入ってきて、それをフュージョンさせて新しい日本を創り上げていく、それを京都人の「ほんまもん」という型式学や環式学によって評価し、さらに世界に発信していく動きを創り出していければと思う。京都の若い人をどのように引き入れるかも重要で、京都の外からやってくる若者たち、京都にいる若者たちを惹きつけて、生活文化をいかにデザイナーとして作っていくかのリテラシーをこの期間に高めていただきたい。

- ・2019年の国際博物館会議（ICOM）を成功させて、1つのモデルケースとして、2020年につなげられるようにしたい。これから、アーツアンドクラフツ、くらしの文化につなげていく中で、このICOMの機会に京都にどのような美術・工芸、伝統文化がどのように定着し、未来に変わっていくかを140箇国の皆様に見てもらいたい。ICOMのテーマは「伝統を未来へ」であり、この機会に集まる人は京都が伝統と未来をどのように考えているかに関心が非常に強い。将来、未来のあり方を見てもらえるようにできればと思う。

京都にはすでに様々な素材があり、ひとつひとつでは発信力が小さいので、連携することによって大きな力を発揮できる。京都で行われている伝統、未来への伝統の力をいかにつないでいくかも重要である。

- ・京都文化カプロジェクトの意義、やり方は、行政から一般の府民市民に、文化芸術の専門家・発信者から観賞者に一方通行ではなく、それを受け止めて観た人が、どのように地域や家庭で自分たちのものとして融合して、そして、新たに創造していくことができるのかで、双方向の関わりを呼び起こすことが非常に重要ではないかと思う。

特に若い人にはこれから続いていくイベントを開催する意味、なぜ関西で開催するのか、未来はどのように変わっていくのか、どのような良いレガシーがあるのかを伝えていく必要がある。それによって、誰もが文化の起業家として、自分のこととして参画していくのではないかと思う。

このように個別ではなく連携、融合していくことによって新しい価値を創り出すことは素晴らしい着想点であり、趣旨に基づいて細やかに必要なところに伝えていきたい。

- ・寺院では、僧侶、建物、教えも文化遺産の中で生活しており、文化遺産を日々活用しているが、それを社会的に継承するには、檀家、信者などを構成する家族、地域が縮小しつつある。如何にそれを抑えるか、さらには再生、発展させるかが課題である。

一例として、愛宕神社が過去には白雲寺でもあったように、もう一度「神仏習合」に戻

ると神社、仏閣が中心となり、文化力が拡大し、護持、発展するのではないかと考える。どの寺にも明神さんがおられ、地の神様の許しを得て寺が創設された歴史があり、その地域に文化が芽生え、仏教的教え、神道的風習を背景に発展してきた。これを総合的に再生させてはどうか。

- ・ 京都は歴史伝統文化を継承している大きな力があり、それと同時に宗教都市でもありません。伝統は古い形を守っていくことも大きな役割ですが、その上に今の時代の新しいものを付け加えて、伝統を高めていくことが必要である。

神道は、他の宗教と違って道の信仰であり、日本のすべての伝統文化に通底するものの1つである。京都に伝わる長い歴史、伝統文化をこれからも発展させていくことが我々の役目だと思っている。

- ・ 1つ目は京都は文化首都として確立するという大きな目標がある。この中身をどう作るかは、京都が得意とする文化遺産と科学技術に大学等が融合していくことだと思う。

2つ目に日本全国の中でどのように京都がリスペクトされていくかという取組で、関西のパワー全体を京都が引き上げることである。「はなやか関西・文化戦略会議」の予算を増やし、京都から関西全体の力にしていくべきである。京都にアジアにおける文化首都を担えるほどの構えを作ってもらえないか、国際会議で強いイニシアチブを取ることを考えていただきたいと思う。

3つ目は世界の文化首都、日本の文化首都からはじまり、次にアジアの文化首都、そして、世界の文化首都と考えたときにはパリとなるが、パリには、国際機関としてユネスコがあり、様々な国際会議が開かれており、国際的なアーティストの集積がある。世界の文化首都パリ、京都を考える中で、ぜひユネスコの様々な役割を京都にとってほしい。

- ・ クラフト作品の多くが京都で作られており、多くの流通の拠点が京都にある。世界の人々もだんだんとその魅力に気づきつつあるものの、わからないことは理解できないし、買うこともしない。子ども時代から本物のクラフツを使っていく生活習慣が必要でないかと我々は考えている。くらし文化も廃れていくという局面ですので、廃れていかないためにはどのようにしたら良いか検討していきたい。

- ・ これまで日本は欧米から輸入をすることをしていたが、これからは世界が日本を学ぶ時代に転換していく、2020年がそういう時になると思う。

2019年にはICOMがあるが、京都が持っている学術的な価値、日本文化の精神性、宗教性、それらを含んだ学術思想分野を大切にする、芸術、工芸、演劇など様々な分野をはっきりさせ、日本の歴史を我々も認識していく必要がある。

また、京都府、市が持っている恵まれた自然を大切にして、それを含めたプランを考えなければならない。

京都全体が1つの博物館であり、様々な見方をするができる。神社仏閣を見て回る、美術工芸を見て回る、自然を見て回る、演劇のツアーに行く等、いろんな角度で京都を楽しむことができ、様々なコンセプトを持つことができる。2020年以降も京都が日本を代表する世界の都市であるというコンセプトでがんばっていくと良い。

新しい創造を積極的に進め国際的に、発信していくことが大事である。

2020年以後、京都市立芸術大学が京都駅近くに移転する。京都の南側ももっと魅力的な市街地になっていきますし、広い視野で文化を育成していくことが大切であると考える。